

① 信徒の召命

信徒は、教会生活の最前線に立っています。信徒によってこそ、教会は人間社会に生命を与える源となります。ですから、信徒は、自分たちが単に教会の一員であるということだけではなく、教会そのものであるということ、今まで以上にはっきりと自覚しなければなりません。つまり、すべての者の頭である教皇と、交わりのうちに教皇と一致した司教たちに導かれた地上の信者の共同体、これが教会なのです。（ピオ12世「新枢機卿へのあいさつ」1946年2月20日）

すべてのキリスト信者がそうですが、信徒は洗礼と堅信とによって神から使徒職に任じられたので、個人として、あるいは団体として、神の救いの知らせが世界中のすべての人に知られ、受け入れられるように努める義務と権利を持っています。この義務は、人々が信徒によってしか福音を聞き、キリストを知ることができない場合は、いっそう緊急なものとなります。教会共同体の中で信徒の活動は必須であり、信徒の活動を抜きにした司牧者たちの使徒的活動は、多くの場合、十分な効果を上げえないのです。

② キリストの祭司職への信徒の参与

「信徒はキリストにさげられ聖霊から塗油された者として、霊の果実が自分の中につねにより豊かに実るようにするという、すばらしい召命と手段を受けています。彼らがすべての仕事・祈り・使徒的活動・家庭生活・日々の労苦・心身の休養を聖霊において行い、なお生活のわずらわしさを忍耐強く耐え忍ぶならば、これらのすべてはイエス・キリストを通して神に喜ばれる霊的いけにえとなり（1ペトロ2・5参照）、聖体祭儀の執行において主のからだの奉献とともに父に敬虔にささげられます。このように信徒もまた、どこにおいても聖なる行いをもって神に礼拝をささげる者として、世そのものを神に奉献するのです」（『教会憲章』34。同10参照）

父母は、「キリスト教的精神のうちに夫婦の生活を送り、子女のキリスト教教育を配慮することによって」（新教会法典第835条第4項）特別なしかたでこの聖化の任務に参加します。

信徒は必要な適性を備えているならば、恒常的に朗読奉仕者や祭壇奉仕職に任命されることもあります。「信徒は、奉仕者が不足し教会に必要と認められる場合には、法の規定に従い、朗読奉仕者または祭壇奉仕者ではなくとも、その若干の職務、すなわちことばの奉仕職を果たし、典礼の祈りを司式し、洗礼を授け、聖体を分配する職務を果たすことができます」（新教会法典第230条第3項）

※「カトリック教会のカテキズム」278頁、279頁